



ベースオイル20円近い上昇

添加剤は5~15% 7~9月

原材料の需給ひっ迫深刻化

潤滑油専門メーカー 製品大幅値上げ出動

潤滑油専門メーカーが、原材料の大幅な値上がりで調達難に見舞われ厳しい状況に追い込まれている。原油高を受け7月以降のベースオイル価格は前期比で20円近く上昇。10月以降も7円程度上がる観測が現実味を帯びる。グループIIIでは、新型コロナウイルス禍によるアジア市場での需給ひっ迫が続いており、手当てが難しくなっている。加えて主要添加剤メーカー各社が打ち出していた5~十数%の値上げが決着。業界内には減販下でかさむコストに緊迫感が増す。専門メーカーでは、需要家企業への値上げ浸透が経営存続の力ギとして、今後本格化する厳しい価格交渉を乗り切る姿勢だ。

ベースオイルは潤滑油製品の主要原料。全石油工業協同組合が大手元売から購入、組合員企業に販売している共同購入物でみると、7~9月分は前期比でグループIが18円30銭、環境対応型エンジン油など高性能製品の製造に必要なグループIIIは16円30銭大幅に上がる。ともに2015年以降で最高の上昇幅となる。

2021年1~3月分からの連続上昇で、3四半期累計の上昇幅はグループIが35円50銭、グループIIIでは33円にのぼる。足元で70%超と高値で推移する原油動向から、専門メーカー筋では「10~12月分でも7円程度の値上がりが見込まれる」との見方を示す。

大幅な値上がりは原油高が主要因だが、韓国産に依存しているグループIIIではコロナ禍の影響が大きい。世界的な移動制約で航空機用燃料の需要消失など、燃料油バランスの変化でシンカボールの

製造所稼働率が低下し、ベースオイルの供給が減少。アジア市場の高騰を招いている。

国内では2月末からの製油所の定期修理に備えて元売が積み上げ生産したことで、グループIIIの供給は保たれているが、グループIIIの需給ひっ迫は深刻。元売では一部製品の出荷を制限する事態になっているという。

添加剤も値上がりする。米系主要メーカー各社が打ち出していた値上げが決着。上げ幅はおおむね5~十数%で、メーカーや用途によっては15%を超える。とくに金属加工油に使う硫黄系添加剤などの上げ幅が大きい。

値上がりは2月に北米を襲った寒波で化学工場が休止した影響が長期化しているためだ。同災害では停電などで添加剤メーカーが製品を製造するための基材供給が停止した。いまでも生産休止中の受注残を消化しきれない状況で、基材不足による供給タイトの影響は今年度下期まで続くとみられている。北米からの輸送費増もコスト押し上げ要因だ。

専門メーカー間にはベースオイルや添加剤の入手困難から7月以降の不透明感が漂う。納期の遅延発生なども伝えられる環境下、専門業者各社は7月から製品納入価格の大幅値上げに踏み出す。

「7~9月分は4月時点の予想どおり大きく上がった。完全転嫁を実行して収益悪化を回避しなければならぬ。待ったなしだ」(首都圏の業者)。「まだまだしてられない。即時転嫁が必要」(別の首都圏の業者)として、これまでの未転嫁分を含めた決着に向け、取引先の需要家企業と価格交渉を進める姿勢を示している。



OPEC事務局長、石油市場の回復に自信 「デルタ株は不確定要素」



バーキンド事務局長

〔ロンドン 29日 ロイター〕 - 石油輸出国機構（OPEC）のバーキンド事務局長は29日、石油需要が年後半に力強く持ち直すと予想される一方、新型コロナウイルスの変異株が回復のリスクになるという認識を示した。

OPECにロシアなど非加盟産油国を加えた「OPECプラス」の合同専門委員会（JTC）の会合で、今年の石油需要は日量600万バレル増加し、そのうち500万バレルは年後半に集中すると予想。同時に、インドで初めて確認された「デルタ株は多くの地域で感染者数の増加や制限の強化をもたらしており、不確定要素だ」と述べた。

また、5月の統計（速報値）を見ると、経済協力開発機構（OECD）加盟国の石油在庫は2015—19年の水準を割り込んでおり、不確実性や関連リスクを考慮したとしても年後半の伸びはかなり大きいとした。

関係筋によると、会合では一致した結論などは導き出せなかった。OPECプラスの合同閣僚監視委員会（JMMC）は7月1日に会合を開く。需要回復による原油価格の値上がりを受け、8月以降も減産の段階的縮小を継続するか検討する見込みだ。



インドの燃料需要、年末までにパンデミック前の水準回復＝石油相

[ニューデリー 29日 ロイター] - インドのプラダン石油・天然ガス相は29日、新型コロナウイルスの感染第2波によって打撃を受けたインドの燃料需要は年末までにパンデミック（世界的大流行）前の水準に回復すると述べた。

インドの5月の燃料消費量は一部の州でロックダウン（都市封鎖）や制限措置が実施されたことを受け昨年8月以来の低水準となったが、プラタン氏は各州のロックダウンが解除されたことなどに伴い、インドの燃料需要は今月に入り回復の兆しを見せていると指摘。世界的な原油価格の高騰による影響はあるものの、「年末までには本来の消費行動を取り戻すことができると確信している」と語った。



7月以降の原油市場を占ううえで大きな材料のひとつとされる、OPECプラス閣僚会合が1日に行われる。6月の原油価格は一貫して強基調を示したが、開発投資の停滞もあって米シェール生産の伸びが予想以上に鈍く、市場に対するOPECプラスの存在感は、かつてのOPEC（石油輸出国機構）を彷彿とさせるほど強まっている。

存在感強める OPECプラス 100ドル到達も掌のうちに

OPECプラスは、5〜7月の3カ月はそれぞれ35万バレル、35万バレル、44・1万バレルの段階的減産緩和で合意している。今回の会合では8月以降の方針が議論にのぼるとみられるが、大方の予想では、市場動向を見極めながら段階的に減産緩和を進める、これまでの姿勢を維持するとの

見方が強い。OPECプラスの傾重姿勢に対し、新型コロナワクチン接種拡大

にともなう需要回復が上回るとの観測が足元の油価上昇の要因。さらにコロナ禍で落ち込

んだ原油需要が2022年後半には回復するとの予想に対し、上流投資が追いつかないとの見方から、一部では「原油100ドル説」も浮上し始めた。

ただサウジアラビアの5月の生産量（OPEC月報）が846・6万バレルだったのに対し、OPECプラスの協調体制が一時的に崩壊した昨年4月は1200・7万バレルに達していた。産油国が自らの存在感を示して、供給余力を国際社会に提供するかどうかが大きな焦点になる。



東南アジア物流ひっ迫

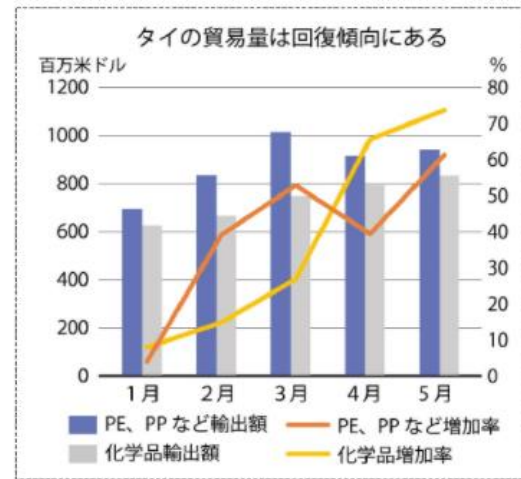
【バンコク＝松井連心】
 新型コロナウイルスからの経済回復が進み化学品の国際貿易が活発化するなか、長引く海上コンテナ不足が物流の足かせとなっている。製品や原材料の輸出入が増加しているタイをはじめ、東南アジアではコンテナ船の確保や運賃の高騰が続く。物流関係者の間では「今年いっぱい問題の解消は難しいだろう」との見方が大勢。生産活動に影響するような不測の事態に備え、部品メーカーや化学メーカーでは在庫を多めに確保する動きが広がっている。物流事業者は堅調な荷動きを支えようと、運搬方法の選択肢を増やして対応している。

コンテナ不足 長期化

米欧で港湾作業遅延し戻らず

コンテナ不足による物流の混乱は、回復が見通しづらく状況となっている。長期化の要因として関係者が指摘するのは、ロサンゼルス港など米欧で新型コロナウイルスの影響により港湾作業員の不足が生じ、荷下ろしや積み込みなどの作業効率が低下している点だ。これによりアジアにコンテナが戻らない状況が続いている。港の沖合で船の身動きが取れない滞船状態となり、新たに積み荷を決め運航スケジュールを組み配船作業を取りやめ、欠便とするケースも出ている。こうした事例が全体の需給バランスを圧迫。物流業者は「コン

テナのスペースを確保するのが難しい」と口を揃える。液体化学品の輸送に使う



タイ、メーカー在庫積み増し

運賃はコロナ前の3～4倍

優先し、フォワーダーなどが所有する）ISOタンクコンテナの優先度は低い」（シンガポールの日系物流企業）。

海上輸送のひっ迫によって運賃は上昇。物流のハブであるシンガポールからロッテルダムまでの40日コンテナ1個の運賃は6月中旬時点で1万1000円ほどと、コロナ前と比べ3～4倍の水準にある。

一方で物流ニースは堅調だ。タイ商務省がまとめた5月の輸出実績は、ポリエチレンやポリプロピレンなどの樹脂が前年同月比61・4%増、化学品は同73・8%増。これらは昨年12月から回復傾向に入り、自動車・部品などとともに5月は一昨年の水準を超えた。化学品の輸入も同様で、5月は同51・5%増えた。物流に不安要素があるな

か、タイでは安定供給を維持したいメーカー側に製品や原材料の在庫水準を引き上げる動きが出ている。ある樹脂メーカーは輸入する原材料の在庫を通常より多い2・5カ月分とし「添加剤などは多めに在庫している」と話す。自動車部品メーカーなどもこうした方針を打ち出しているもようだ。ただ、海上輸送のリードタイムが長くなる一方で製品の引き合いが増え、倉庫に物が入ったと思ったらすぐに出ていく（タイの日系倉庫事業者）という事例も。在庫の積み増しも即座にとはいかない状況だ。

物流業界は例年、クリスマス商戦に向けて年後半に輸送量が増える。しかし現状は、東南アジアでの感染再拡大などにより巣ごもり需要が継続しているうえ、ワクチン接種が進んだ国では消費意欲が戻り物流需要は旺盛。クリスマスシーズンを前にすでに繁忙期に近い状況に入っていることを不安視する声も出ている。